

宗教心理学研究会ニューズレター

第35号 2023.8.15

宗教心理学研究会

Society for the study of psychology of religion

目次

第19回研究発表会報告	報告 辻本 耐	1
日本心理学会第86回大会公募シンポジウムでの発表を終えて		
—「ズレ」を大切にしよう—	西脇 良	6
シンポジウムを通して感じたこと	川島大輔	7
学術誌をめぐる最近の動向	白岩祐子	8
日本における宗教心理学の形成過程を語ることの意義	藤井修平	9
マイナーリーグからの挑戦: メジャーに根付くための五つの課題	Masami Takahashi	10
いいね! オンデマンド動画コンテンツ	木村 健	12
実証的宗教心理学の挑戦と軌跡		
—日本心理学会第86回大会公募シンポジウムへ参加して—	中分 遥	13
事務局からのお知らせ		15

第19回研究発表会報告

日本心理学会第86回大会公募シンポジウム

掘り起こされていない研究分野を開拓する方法(現在進行中)

—実証的宗教心理学の挑戦—

報告 辻本 耐(南山大学社会倫理研究所)

2022年9月8日から11日までの3日間、日本大学文理学部において日本心理学会第86回大会が開催された。この大会において本研究会による公募シンポジウム「掘り起こされていない研究分野を開拓する方法(現在進行中)—実証的宗教心理学の挑戦—」が企画された。今回の大会は3年ぶりに対面での開催であったが、公募シンポジウムについてはオンデマンド開催であったため、事前に収録した動画を配信する形式となった。

さて、本研究会が2003年7月に立ち上げられ

てから20年に及ぶその活動の中で、2度の研究プロジェクトが企画・実行され、現在も大きなプロジェクトが進行している。さらに、4冊の宗教心理学に関する専門書が出版され、最近になって学術誌も創刊された。この度のシンポジウムは、こういった宗教心理学研究会の活動・業績を振り返りながら、日本の宗教心理学徒の挑戦の姿を示すとともに、今後の研究会のあり方を模索するために企画された。本稿ではこの発表会の報告を行う。

企画説明: 松島公望(東京大学)

はじめに司会の松島先生より、以下のようなシンポジウムの企画説明が行われた。

日本の宗教心理学領域は、研究について語り合うコミュニティがない、協働して研究を行うプロジェクトがない、学ぶための書籍がない、研究の受け皿となる学術誌がない、近接領域との交流がないという、まさに「ない」「ない」ずくしの掘り起こされていらない＝未開拓の状態であった。その大きな理由として、日本における宗教風土の複雑さにより、日本人の宗教性を特定することが困難であったことがあげられる。元々、個別性が強い宗教は一般化・普遍化・平均化を目指す心理学との相性が悪いこともあり、この分野における研究は思うように進んではいなかった。もちろん、全く研究がないわけではなかったのだが、その成果のほとんどは大学紀要や宗教団体の機関誌への掲載にとどまっていた。インターネットが整備されていなかった四半世紀前では、こういった論文は人目に触れることが少なく、研究知見が継承・議論されてこなかった。その結果、方法論も洗練されてこなかったことから、この分野において研究がますます進まないという悪循環に陥っていたのである。こういった状況を打破するために、研究会を立ち上げ、研究プロジェクトに取り組み、専門書や学術誌を作り、近接する学問分野との連携・協働を始めたのである。

このシンポジウムでは5つの話題提供と指定討論を通して、現在進行しているこれらの取り組みを紹介し、いかにして掘り起こされていない研究分野(宗教心理学)を開拓してきたのか、研究会の取り組みを報告するために企画した。

話題提供 1 辻本耐(南山大学社会倫理研究所)

本稿の執筆者である辻本は「研究会を設立することの意義」について以下のように報告した。

19世紀末から20世紀の初頭、日本では米国とともに実証的宗教心理学の研究が始まった。つまり、当時は日本でも宗教心理学への関心が高かったと言える。しかし、現在の日本における宗教心理学は、すっかりマイナーな研究分野になってしまった。その理由として、宗教に対する一般的なイ

メージがよくないため研究テーマとして選ばれにくいこと、ユダヤ・キリスト教的世界観に基づいた欧米式の方法論では日本人の宗教性を捉えることが困難であること、査読付きの雑誌に掲載されるような優れた研究成果をなかなか生み出せなかったことが考えられる。これらの問題点を解消するために、近接する学問分野と連携・協働し、研究成果を共有・議論できる場を設けながら方法論を洗練させ、その洗練された方法論を用いて質の高い成果を生み出し、心理学領域における宗教心理学のプレゼンスを高めていかなければならない。

そのためにはまず研究者のコミュニティが必要だろうという考えから、松島・西脇の両先生が1999年から準備を進め、2003年7月に研究会を正式に発足させた。研究会発足後、同年の9月に開催された日本心理学会第67回大会において、ワークショップ「実証的な宗教心理学的研究の展開—その歴史と現状—」が企画された。このワークショップ終了後に発足を兼ねた懇親会が開催され、そこに出席した約10名のメンバーが最初の会員となった。その後も徐々に会員数を増やししながら、ニューズレターの発行、研究発表会、読書会、研究プロジェクトの立ち上げなど、研究会として実績を積み重ねてきた。

今後の研究会のあり方として焦点となるのは、「学会」への昇格であろう。米国にはAPAの一部門として"Society for the Psychology of Religion and Spirituality"という学術団体がある。本研究会は学会になるための要件を既に満たしていることから、日本でも米国のような学術団体を発足させようという機運は研究会内で高まりつつある。まずは現在の組織運営のあり方を検討し、学会になることによるメリットとデメリットを慎重に検討していく必要があるだろう。

話題提供 2 西脇良先生(南山大学)

西脇先生より「研究プロジェクトを起こすことの意義」について以下のような発表があった。

本研究会はこれまでに2つのプロジェクトに取り組んできた。研究会発足から2年後の2005年に実施された「宗教心理学の体系化に関する研究—宗教心理学の社会的貢献にむけて—(基盤研

究(C)企画調査)」では、現代社会の諸問題を念頭に先行研究を整理・分類する文献研究が中心であった。その7年後に、さらに規模の大きなプロジェクトとして、「宗教性 / スピリチュアリティと精神的健康の関連 - 苦難への対処に関する実証的研究 - (基盤研究(B))」が実施された。このプロジェクトでは、質的研究班と数量的研究班に分かれて、フィールドワークに基づく調査や大規模な質問紙調査が実施され、実証的側面が重視された。そして現在、3回目となるプロジェクト「ユダヤ-キリスト教的文脈の脱構築を試みる宗教性 / スピリチュアリティにおける実証的研究 - 日本人の宗教性の実態解明および日本とトルコとの比較調査, 比較実験(国際共同研究) -」が立ち上がり進行している。このプロジェクトでは、ユダヤ-キリスト教といった一神教の文脈から脱却して、日本人の宗教性 / スピリチュアリティを把握することを目的とし、最終的には国際比較調査も予定されている。

これら一連のプロジェクトは本研究会の発展のために必要なプロセス、喩えるならば「トリプルジャンプ(三段跳び)」であったように思われる。まず、1つ目のプロジェクトにおいて研究会のアイデンティティを確かめ、2つ目のプロジェクトにおいて実証データに基づく議論を可能にし、現在進行しているプロジェクトにおいて欧米中心の宗教性とは異なるオルタナティブを海外に発信していくという展開になっている。こういった本研究会の取り組みを踏まえて、研究プロジェクトを立ち上げることの意義を指摘すると、多様な視点や知識をもつ専門家が結集されること、結集されたメンバー同士でネットワークが形成されること、メンバー間の視点・問題意識・論点のズレが新たな可能性を生むことの3点を挙げることができる。一方で、多くの人がプロジェクトに関わる場合、メンバー間で結論が共有されているかどうか、タスクを担う者に偏りがいないかどうかなどといった点に留意する必要がある。

話題提供 3 川島大輔先生(中京大学)

川島先生より「本を出版することの意義」について以下のような発表があった。

本研究会が2011年に最初に企画したのが、

60年ぶりの宗教心理学の概論書である『宗教心理学概論』であった。その後、2016年に『宗教を心理学する』と2020年にその英訳版である"The Empirical Study of the Psychology of Religion and Spirituality in Japan"が出版された。現在、『宗教'が拓く心理学の新たな世界』が企画され、出版準備中となっている。

本を出版する意義は、誰に対して何を伝えたいのかによって、企画の趣旨や構成は変わってくる。例えば、専門家向けに研究の集大成をまとめたいという場合や、初学者向けの概論書を出版したいという動機もあるだろう。また、一般人向けに研究成果を広く発信することを目的に本を企画することもある。

もちろん、業績書に書きたい、専門家として認知されたいなどの理由も考えられ、その人がどういったことを重視するかによって、出版の意義も異なってくると思われる。

いかに書籍化していくのかについても秘訣がある。例えば、大学院生ならば査読付き論文をたくさん執筆して、博士号を取得することが重要になる。そもそも学生の身分で自ら本を企画するのはあまりに荷が重し、そういったノウハウもない。そうであるならば、無理に効率の悪い書籍化を目指すよりも、ベテランの先生が計画した出版企画に参加させてもらうという方法もあるかもしれない。そのためには普段から他の研究者との交流が大切になってくる。学位を取得して若手研究者になったのであれば、出版助成を活用してもよいだろう。また、出版業界の厳しい状況を鑑みて、教科書や一般向けの内容に絞りながら、出版社の担当者に書籍の内容を面白い・大切だと思ってもらう工夫をしていくことも重要である。

以上のように、書籍化はあくまで研究発信の一つであり、それによって何を達成したいのかを考慮することが大切である。

話題提供 4 白岩祐子先生(埼玉県立大学)

白岩先生より「学術誌を創刊することの意義」について以下のような発表があった。

学術誌の起源は17世紀のヨーロッパであった。それまで私信や書簡によって学術的な成果や発

見を個別に伝えていたが、学術誌というメディアによって、誌上で広く公開・発信できるようになった。

この学術誌には査読がつきものである。この制度が現在の形で普及したのは70年代であったと言われている。しかし、必ずしも最初から順調であったわけではなく、米国において「身内によるお友達システム」「新しいアイデアを塞ぐ」といった批判もあった。最終的に、研究の質を判断するうえで、査読がベストではないにしろベターだということでのこの制度は維持され、現在に至っている。

同じ70年代に、学術誌の発行母体にも変化が生じた。それまで主流であった学会出版から商業出版に勢力が移行した。さらに90年代になると、インターネットが普及するとともに、世界的に論文数が増えたことから、米国のある出版社が包括オンライン契約(ピック・ディール)を導入した。しかし、その契約料が年々値上がりしたため、大学図書館は通常図書や小規模学術誌の購入を断念せざるを得ない事態となった。その結果、小規模出版社の身売りと大手による寡占を招いてしまい、システムの契約料がさらに高騰するという悪循環をもたらした。こういった事態に対抗するため、大学や研究者がPLOS(Public Library of Science)を立ち上げてOA誌(Open Access Journal)を刊行し、大きな成果を収めた。ところが皮肉にも、研究者が支払う掲載料やOA経費、つまり国からの研究費を目当てにした商業出版社がOA化市場へと瞬間に参入してきてしまった。

こうした学術誌の経緯を踏まえたうえで、本年創刊された『宗教／スピリチュアリティ心理学研究』を紹介したい。この雑誌の目的は、ユダヤ・キリスト・イスラム教といった一神教に必ずしもとらわれないローカル性を踏まえた研究の発表場所を確保すること、宗教心理学研究の成果を集約一元管理することである。本学術誌の特徴は、17世紀当時の学会出版の系譜を受け継ぐもので、研究成果の公開と発信を目的に立ち上げた研究者による研究者のための学術誌である。また、研究会として可能な限りの査読体制によって学術誌の質を維持し、査読システムの弱点である独創性の芽を守る努力をしつつ、OAをデフォルトとすることで誰でも研究成果にアクセスできる環境をつくり、掲載料フ

リーの媒体を通じて研究の促進と次世代の育成をはかっていく。本学術誌はこういった志向性をもって本年創刊された。多くの研究者からの意欲的な論文投稿に期待したい。

話題提供5 藤井修平先生(東京家政大学)

藤井先生より「近接する研究分野(宗教学)と連携することの意義」として、心理学と宗教学の連携によってどのようなメリットが得られ、研究が展開されていくのかについて以下のような発表があった。

米国と比べて、日本の宗教心理学分野はほとんど進んでいない。その理由として、「宗教の研究」というと怪しいという印象があること、宗教が日常生活に関わっていないこと、心理学的方法で宗教を扱うことができないと思われていることがあげられる。私はこれらの問題は心理学と宗教学の連携によって解決できると考えている。具体的には、宗教の定義問題を解決したり、検討すべき理論的枠組を提供したり、既存の心理学的研究を宗教の観点から統合したりすることができるというメリットがある。本発表ではこれらのうち宗教の定義問題に関する貢献を中心に扱う。

各種の調査結果から、日本人は「特定の宗教を信じている」という面ではあまり宗教的ではなく、「不思議なものを時々信じる」「宗教的といえる行為を行う」という面において宗教的な人が多いことが分かっている。つまり、宗教には複数の側面があるのである。そのため、最初に「宗教とは何か」という宗教概念を実証的に解明しておかなければならない。その解明方法として、日本で取り組まれた宗教に関する尺度研究の収集と項目分析、新聞のデータベースやSNSなどに認められる「宗教」という単語の計量テキスト分析、プロトタイプ理論(人は概念を定義的特性によってではなく、相互に類似性のあるゆるやかな集まりである家族的類似性によって理解しているとする認知科学の理論のこと)を用いた宗教概念の把握という3つの調査を計画している。

以上のように、多面的で文化差のある「宗教」概念を十分に把握できていなかったことが宗教心理

学の停滞をもたらした原因の一つであり、宗教学との連携はこの問題の解決および日本人の宗教性の解明に貢献できると考えている。

指定討論 Takahashi Masami(イリノイ州ノースイスタン大学)

本シンポジウムの指定討論として、Takahashi 先生より以下のようなまとめが行われた。

日本において宗教心理学がマイナーな理由としては、これまでの指定討論を踏まえると、次の5つを挙げることができる。

まずは松島先生が述べていた「ない・ないだらけ」である。特に宗教心理学の研究者がいないと、学部生や院生にとって指導者がいないことになり、将来的に後進が育たないという事態になってしまう。こういった場合、たとえ自分の指導者が宗教心理学を専攻していなくても、その指導者の「ある・できる」を引き出す、つまりその専門性を利用すればよいのである。宗教心理学を研究する場合、必ずしも宗教に関する知識が必須というわけではなく、発達心理学、認知心理学、社会心理学など他の専門性に寄せて研究する(指導を受ける)こともできるし、その人の宗教的な経験から心理的なメカニズムを見出すことも可能である。また、文献や資料がないのであれば、他の分野の知識や理論を援用するなどして、クリエイティブに探すことも必要である。

2 つ目は「研究発表の埋没」である。研究発表が埋没してしまうと、そのデータベースを作ることができない。これがないと経験知の蓄積が困難となり、研究結果の公開性や透明性にも影響してくる。さらに、今後は APA などが率先して行っているようなデータそのものを公開し共有していくことも必要だろうと考えている。我々が分析し終わったデータを公開することで、他の研究者が違う視点で分析を行ったり、学生が利用したりすることができ、この分野の発展につながっていくように思われる。さらに、英語で執筆された論文や書籍も欠如している。例えば我々が英語の書籍を出版した際に、すぐに海外の研究者からレスポンスがあった。つまり、英語で発信することで、今まで日本の中で埋没していた領域が世界に広がっていく可能性が

あるのだ。同時に、宗教的概念を日本語から英語に変換する際の語彙・概念のツールを日本人の研究者に提供することにもなるため、英語での研究成果の発信は重要である。

3 つ目は「過去の栄光にすぎれない」ことである。19 世紀末頃に日本でも宗教心理学が注目されていたという報告が辻本よりあったが、この時代の研究は仏教に偏りすぎていたという問題があった。このことが後々の実証的な宗教心理学研究の妨げになってしまったという解釈もある。また、辻本は「一般の人は宗教に関わる機会が少ない」と述べたが、日本人は宗教的なものを見たり、聞いたりしても宗教に結びつかない、つまり、宗教に関する思考枠組が根付いていないと考えるべきではないだろうか。

4 つ目は「日本の宗教における複雑さ」についてであるが、米国においても、宗教の上に、人種やジェンダーという要因が重なって、複雑なものとなっていることから、その複雑さは日本において宗教心理学がマイナーであるという根拠にはならないと思われる。この複雑さに加えて、一般化・普遍化・平均化の問題は心理構造の話で、心理機能の話ではない。宗教心理においては、宗教心やスピリチュアリティの心理構造を理論づけて、実証によってその理論の価値や妥当性を査定していくというアプローチが重要だと思われる。

最後に、「日本心理学界全体の構造的欠如の大枠の欠如」についてであるが、特に実証研究という傘の中に細分化された米国心理学会(APA)とは異なり、その日本版である日本心理学諸学会連合(JUPA)は必ずしも実証研究を土台としない多くの心理学に関連する学会の寄せ集めであり、その結果、宗教に関心のある研究者は実証研究を重視しない人文学系の学会で発表しなくてはならない立場になっているようである。このような構造的問題についても何か打開策が必要であろう。

まとめとして、データベースの作成は必須であり、そのうえで日本文化にも適した測定法・質問紙を開発しなければならない。こういった作業が精緻な実証研究を実施していくことにつながっていくと思われる。もう一つは、宗教心理学学会を含めた心理学界全体の枠組の(再)構築である。つまり、日

本における心理学の諸学会も米国にならない、実証研究を共有した枠組の中に各学会が所属すると

いう仕組みとなるのが理想的だと考えている。

日本心理学会第 86 回大会公募シンポジウムでの発表を終えて —「ズレ」を大切にしよう—

西脇 良(南山大学)

オンライン配信形式となった日本心理学会第 86 回大会公募シンポジウムでの発表を終えて、筆者なりの所感を述べてみたい。

シンポジウムのタイトルに「掘り起こされていない研究分野を開拓する方法(現在進行中)」とあるように、未開拓の研究分野に対してどのような接近方法があるのか、宗教心理学研究会の実践や展望を通して示そうとしたのが、今回の企画内容であった。具体的には、当該の研究分野に関心をもつ研究者らがネットワークを構成し(研究会設立)、研究プロジェクトを遂行し、その研究成果を公刊して当該の研究分野の認知を図ると共に、研究の更なる発展を目指して学術誌を創刊する、という一連のプロセスを紹介する内容となった。このプロセスはまさに、今夏には設立 20 周年を迎えることになる宗教心理学研究会の歩みそのものである。筆者は 5 つの話題提供のうち「研究プロジェクト」の立ち上げ部分についての発表を分担させていただいたが、その意味でも感無量の思いであった。

発表の中でも取り上げたが、研究会メンバーを中心として立ち上げた研究プロジェクトのもつ意義は、多様な視点や問題意識をもつ研究者が集うがゆえに、視点や問題意識に「ズレ」が生じてくる、ということにあると思われる。メンバー自身の宗教的背景や学問的背景が異なることによるズレ、ということになるだろうか。例えば、

「無宗教」という言葉は通常「(信仰する)宗教をもたない」という意味で用いられ、社会的アイデンティティとしての宗教が含意されている。しかし筆者にとって「無宗教」は、まさに「宗教性」の表現形態の一つである。いわば、社会的アイデンティティとしての宗教の拒否、という表現態をとる「宗教性」ともいえる。したがって、一般に理解される「無宗教」とはズレてくる。こうした、宗教心理学で用いられる概念のズレというのは、多かれ少なかれ、日常的にみられることなのかも知れない。研究プロジェクトを立ち上げ、メンバーが一同に会して議論をする段になって、あらためてそのズレがクローズアップされる、ということなのであろう。大切なのは、こうした視点や問題意識の「ズレ」を、回避するというよりはむしろ、「ズレ」から新たな研究の方向性が見えてくるかも知れない、という期待をもち続ける、ということであろう。「ズレ」のもつ創造的側面に着目するのである。

宗教心理学研究会がその一翼を担う日本の(実証的)宗教心理学は、20 余年を経た今も未だ開拓中である(「進行中」)かも知れないが、着実に前進していることをうれしく思う。と同時に、対面であれオンライン上であれ、研究者間の対話(対話は必ずしも洗練されていなくともよいと思う)、「ズレ」を大切にする対話の在り方を続けていく必要があるだろう。

シンポジウムを通して感じたこと

川島大輔(中京大学)

日本心理学会シンポジウム企画への参加を通じて感じたことを書かせていただきます。

私自身は出版することの意義というお題をいただき、お話をさせていただきました。これまで自分自身、そのようなことを考えたことがなかったため、改めて考える機会をいただけたと思っています。

本にしても論文にしても、誰に何を届けたいかという宛名の問題がやはり大きいように思います。心理学の領域では、論文は主に学術領域の専門家に向けて、本はむしろ一般の人々に向けて書かれることが多いかもしれません。ただし雑誌のオープンアクセス化や書籍媒体の多様化などで、発行形態と読者をそう簡単に結びつけられないようになってきました。また学術書がなかなか売れない時代ですが、研究結果の社会還元も強く求められるようになりました。書籍はこの意味で、一般の方へ研究知見をわかりやすく伝えるための非常に有効な手段だと思います。

この際、手段と目的を取り違えることのないようにしたいと思います。つまり本を刊行するというのは手段であり、それによって何を達成したいのかという目的がもっとも重要ではないかと思えます。もっといえば、誰かに知ってほしいというモチベーションと、なぜそう思うのかの明確な意図を持つことがまず大切なのだと思います。そしてその熱意を受け止めて刊行の後押ししてくれる出版社の存在が不可欠です。

私自身の例で恐縮ですが、『自死で大切な人を失ったあなたへのナラティブ・ワークブック』という書籍を出版した際、なんととしてもこの本を世に出したいという強い思いがありました。私は自死で身近な人を失った方々にお話をお聞きする調査を行ってきました。そのうちのいくつかは論文として出版されましたが、こうした活動には、学術的な意義があったと思います。ただ同時に、遺された方自身にもっと直接役立つようなも

のではないかと模索するようにもなりました。そしてその方法の一つとして、ワークブックの作成を思いつきました。ワークブック自体は、科研費助成や、国内外の様々な方のサポートや助言を受けてなんとか作成できたのですが、本の形がある程度整った段階で困ったのは、その出版を引き受けてくれる出版社が果たしているかどうかでした。読者層が元々狭いことに加えて、ワークだけでなくきちんと学術的背景も記述したいと思っていたため、実際どの程度売れるかというのは正直ビジネスとしてみればかなり厳しい状況でした。それでも企画書をもとに一所懸命意義を説明すると、「採算は考えず、これは出しましょう。出すべきです。すぐに売れるというようなものではなく、細く長く読まれる本になると思います。」と新曜社の塩浦さんがおっしゃってください、無事に刊行することができました。冒頭の記述に立ち返ると、本を刊行するという形以外でも私の目的は達成できたのかもしれない。また予想に反せず、あまり売れていないと思えます。それでも、この本を買って読んでくださったという声を、刊行から10年弱がたった今でもお聞きしますので、世に出せて良かったと本当に思っています。

このほかにも数冊の出版にこれまで関わる機会を得ましたが、そのいずれも執筆者、出版社の協働が必要不可欠でした。『宗教が拓く心理学の新たな世界』は編者として関わらせていただきましたが、これもまた担当編集者の松山さんの理解と強力な後押しでなんとか形になったと思います。松山さんはひとつ前の企画である『宗教を心理学する』でもお世話になりました。そしてもちろん責任編者の松島さんの強い意志なくては成り立ちませんでした。

本を世に出すという行為は、著者の強い思いとそれを支えてくれる人たちの両方がなければ、成立しません。今回の企画とこのニューズレターでの執筆を通して、そのことを改めて認識

するとともに、感謝の気持ちを強く感じております。今回の振り返りで得たことを念頭に置いて、

次の新しい本の企画をぜひ考えたいと思います。

学術誌をめぐる最近の動向

白岩祐子(埼玉県立大学)

本シンポジウムでは、「学術誌を創刊することの意義」という題名で話題提供することを仰せつかりました。そこで、学術誌の誕生と変遷、査読の功罪や雑誌の購読料・オープンアクセス経費の高騰など、近年生じている諸問題について、そのあらましをお話ししました。もともとは、2023年3月に創刊される「**宗教／スピリチュアリティ心理学研究**」の優れた点——**掲載料・購読料ともに無料、会員制でない、アジアではおそらく唯一の宗教心理学系(しかも査読付き)雑誌である、など**——を詳らかにし、その長所を強調するための前段として、学術誌をめぐる上記の問題を対照的に取り上げたわけですが、学会大会以降も、これらの問題に関連するニュース・記事を頻々と目にします。

昨年末には、円安の影響で、千葉大学図書館が来年度、600タイトル以上の海外雑誌の購読を取りやめると決定した旨、報じられました(<https://www3.nhk.or.jp/shutoken-news/20221216/1000087667.html>)。この記事は、SNS上で驚きをもって迎えられのようですが、印象的であったのは、大方の反応が、「そんなに酷い状況なのか」ではなく、「千葉大はまだ持ちこたえていたのか」であったことです。

有田(2021)によれば、シュプリンガー、エルゼビアなどの大手商業出版社が刊行する雑誌に、日本の大学図書館が支払っている購読料は年間300億円を超えとのこと。もはや、各大学の自助努力では如何ともしがたく、昨年2月から始まった文部科学省「オープンサイエンス時代における大学図書館の在り方検討部会」では、「**“一大学一図書館”**という前提にとらわれず、複数の大学図書館で**“コンソーシアム”**を形成し、相互運用の観点から連携して対応す

る」などの取り組み(案)が提示されています(https://www.mext.go.jp/content/20221227-mxt_jyohoka01-000026797_2.pdf)。

これは、高騰し続ける購読料にスケールメリットの面から対抗しようとする試みであると同時に、大学図書館の利便性を大きく向上させる可能性を有した取り組みといえます。例えば、私がいま所属しているような、心理学専攻がなく、この分野の主要雑誌を講読するには、他大学図書館から論文コピー(しかも紙!)を取り寄せねばならない中小規模大学の教員には朗報です。果たして真に使い勝手の良い「図書館連合」ができるのか、それは在職期間中に実現するのかなど、引き続き高い緊張感をもって見守っていきたいと思います。

オープンアクセスといえば、アメリカでは2026年以降、連邦政府から助成を受けた研究の成果(論文やデータ)に、即時公開を義務づける旨のニュースも昨夏、話題になりました(<https://www.whitehouse.gov/ostp/news-updates/2022/08/25/breakthroughs-for-all-delivering-equitable-access-to-americas-research/>)。つまり、読者はそれまで、有償で即時に論文を読むか、1年経過するのを待ち無償で読むか、そのいずれかであったものが、2026年以降は出版と同時に無料で読むことができるわけです。これは、助成の原資が税金であることに照らせば至極当たり前の方針転換といえるでしょう。これに先立ち、サイエンス誌を発行する米国科学振興協会は、連邦政府から助成を受けた論文の執筆者に対し、同誌に掲載予定の論文を、一般公開されるオンライン・リポジトリに格納することを認める運用を試験的に始めました(なお、収支に影響があれば中止を検討する模様)。

ステークホルダーの利害や思惑を超えて、論文を本来の居所である研究者と国民の手に取り戻す。そうした回帰に向けた第一歩は、掲載料・購読料ともに無料かつ査読も受けられる、

本誌「**宗教／スピリチュアリティ心理学研究**」に論文投稿することである旨、再度強調しておきたいと思います。良質な論文の投稿をお待ちしています。

日本における宗教心理学の形成過程を語ることの意義

藤井修平(東京家政大学)

2022年度の日本心理学会における公募シンポジウムの企画「掘り起こされていない研究分野を開拓する方法(現在進行中)—実証的宗教心理学の挑戦—」に、前年に引き続き話題提供者として参加させていただくことができた。ここでは各発表を聞いて感じたことをお伝えしていきたい。

シンポジウムの構成は、宗教心理学に関する「研究会」「研究プロジェクト」「本の出版」「学会誌の創刊」「近接分野との連携」のそれぞれについて、それを行うことの意義を各発表者が伝えるものとなっている。この企画には、宗教心理学という分野を一から立ち上げ、運営してきたこれまでの歩みを振り返り、そこでの苦労や得られたノウハウをモデルケースとして共有することによって、新たな研究分野を開拓するための方法やその重要性を示したいという意図があるのではないかと受け取った。ただしそのような試みは決して完遂されたわけではなく、まだまだ継続していく必要があるということが「(現在進行中)」の言葉で表されているのだろうと思われる。

このような企画のシンポジウムが行われたことは、個人的にはとてもありがたいものだった。というのも、私はこれまで宗教学に心理学・認知科学的手法を取り入れることを目的に、その実践例である宗教認知科学の成立過程などに目を向けてきたのであり、今回のシンポジウムはそれと同様の視点で開催されているためである。こうした視点は理論研究あるいは学説史と呼ばれるもので、他分野との関係で自らの研究の立ち位置を理解し、既存の研究に欠けている

ものを補い、より幅広い視野で研究を行うためにはきわめて重要だと考えている。奇しくも、今年度の日本宗教学会および「宗教と社会」学会の学術大会においても同様の振り返りが行われており、それらと合わせて宗教研究の分野を見直すとてもよい機会になった。

そして実際に、各発表からはとても有意義な知見を得ることができた。辻本先生からは、宗教心理学研究会設立の経緯についてうかがえた。そこでは理論的な側面だけではなく、研究会に関わる人々の面についてもお話いただけたのが興味深かった。どのような研究を専門としていた人が、どういった経緯で宗教に関心を持ち、当研究会に参加するに至ったのかという点は、現代社会において宗教的なものに触れる機会はどこにあり、いかにそれが必要なのかということ伝えてくれるため、当研究会の今後の展開のためにも重要だし、宗教研究者にとってはなおさら把握すべきことである。松島先生自身もこの視点の意義をよく承知しておられることは、この点を深掘りした新著『宗教が拓く心理学の新たな世界』の刊行からも明らかだろう。本書の内容にも大いに注目したい。

続く西脇先生は、研究プロジェクトの立ち上げについて発表された。「宗教と社会」学会の振り返りにおいても、同学会の研究成果を生み出す原動力として研究プロジェクトに言及されており、重要性を認識していたところだった。発表では3つの例を示していただけたうえ、プロジェクトを実施するにあたっての留意点なども聞くことができ、大いに今後の参考になるものだった。

さらに川島先生と白岩先生には、それぞれ書

籍と学術誌の刊行についてお話いただいた。いずれも、書籍・雑誌を刊行することにはどのような意味があるか、他の発信手段と比較してどういった長所と短所があるかという根本的な議論に加え、実際の創刊手順などについても知ることができた。

藤井発表ではこれらとは少々異なる視点から、近接する研究分野である宗教学と連携することの意義について話させていただいた。その内容を簡潔に述べると、宗教学は他分野に対して、個別的な宗教に関するこれまでの研究の蓄積と、「宗教とは何か」を中心とした、宗教に関係する概念についての長年の議論の成果を提供できるというものである。また今後の研究に繋げる目的で、現時点でのいくつかの研究案も提示してみた。

最後となるタカハシ先生の指定討論では、宗教心理学が抱える問題から、宗教を扱う分野に特有の問題、さらには日本の心理学一般の課題にも話が及び、とても勉強になったとともに、今後のために何が必要とされているかを再確認することができた。タカハシ先生は「叡智」に関する研究で新分野を切り拓かれたという業績をお持ちなので、その過程を前例として参照することもまた有意義なのではないかと考えた。

今回のシンポジウムではその意図通り、ある主題に関心のある人を集め、研究会を設立し、プロジェクト研究を実施し、成果を発信するという学術研究に必要な一連の活動を、宗教心理

学研究会を具体例として扱うことで提示することができていたように思える。その意義は第一に、新しい分野を開拓したいと思っている人にとっての模範となりうることだろう。宗教に限らず、いかなる対象についてもこうした研究の進め方は参考になるはずである。第二の、より宗教学的な意義は、今回の内容が日本国内における宗教心理学のこれまでの歩みを把握できるものとなっていることである。そのためこの内容は宗教学者こそが知っておくべきことだと言えるし、心理学の枠内だけでなく宗教学者の間でも、「心理学と連携することの意義」について語る必要がある。

もちろんその役目については、私が担いたいと思っている。今後も、両分野間の橋渡し役として、できる限り交流を促していきたい。前述の「宗教と社会」学会による振り返りにおいては、宗教心理学研究会も何度か同学会で発表しているにもかかわらず、心理学的展開については一切触れられていなかったのも、その点は大いに補う必要が存在する。他方で、東京大学の藤原聖子先生が2022年度に「宗教・道徳的観念の再検討—社会心理学との対話」という授業を実施し、松島先生を含め心理学者をゲスト講師として招くなど、宗教学の側でも徐々に関心は広がっているといえる。そうした関心をより具体的な繋がりに発展させられれば、それは宗教学と心理学の双方にとってよい刺激をもたらすことになるはずである。

マイナーリーグからの挑戦:メジャーに根付くための五つの課題

Masami Takahashi(Northeastern Illinois University)

今回の発表はマイナー(未だ掘り起こされていない)な分野、つまり実証的宗教心理学のような分野が直面する壁とその打開策についてであり、特に宗教心理学研究会のこれまでの活動を中心にした実践的な報告である。研究会設立(辻本)や研究プロジェクト(西脇)の立ち上げの意味、関連出版物(川島)や学術誌創刊のプロ

セス(白岩)、関連分野との協働の意義(藤井)など多方面の経緯・意見提示された。さらに未だ「掘り起こされきれない」根本的な問題として幾つかの点が提示され(松島)、ここではこれらの点も踏まえて主に5つの理由を取り上げる。**[ナイナイだらけ]**

駆け出し分野は一様に研究者の集うコミュニ

ティやプロジェクト、専門書籍や学術誌の欠如、またそれゆえに研究者同士の横のつながりが希薄である「ナイナイ」環境にあることが多い。そのような状況下での一つの方法は「アル」から引き出すことであろう。例えば既存の研究課題や指導教官の専門知識など一見宗教心理学とはかけ離れたような分野にアル概念などを柔軟に解釈して自分の研究に取り入れたりすることである。また通常の実証研究にはない独創的な手法(例:暗黙理論研究や知的考古学など)で自らの分野を開拓するの一手である。

[研究発表の埋没]

これまでの実証的宗教心理学の研究成果が埋没し共有されない主な理由は使い勝手の良い「データベースの欠如」と「専門書籍と英論文の出遅れ」が挙げられる。データベースに関して言えば宗教心理学研究会でもその構築に向けて現在進行中であるが、今後はAPA等で必須とされている研究データの公開・データベース化のように、一歩踏み込んだ努力が必要ではないだろうか。また海外における研究との整合性や結果の共有のためにも今後は英論文での発表を進めることも火急を要する。

[過去の栄光にすがれない]

実証的な宗教心理学は、世界的にもまた日本においても20世紀初頭までは比較的確立された分野であったと言える。それが行動学の台頭などの影響で心理学全体の片隅に追いやられほぼ1世紀になる。そのため現在では概念構築などの根本的な研究も多く行われている。さらに近年は新しい関連概念としての「スピリチュアリティ」が「宗教」と同等の重要性を占めるに至っている。これら二つの主概念についての基本的な研究は今後も必要不可欠であろう。

[日本における宗教の複雑さ]

日本で宗教心理学研究が根付かない理由の一つとしてよく言われるのが「欧米と違い日本の宗教は多種多様で複雑である」ということであるが果たしてそうであろうか？例えば米国において宗教は人種や政治と深く絡み合い、日本には

ない複雑な状況を作り上げている。日本の状況を「より複雑」とせず「一つのユニークな形」として見ることによって他文化との共通項などが見えてくる可能性があるかもしれない。

[日本の心理学会全体における構造的枠組みの欠如]

この問題が一番実践的な「壁」であろう。つまり日本心理学会と全米心理学会の設立に伴う組織構造の違いが、宗教心理学の発展(の遅れ)に影響しているということである。米国の場合、全米心理学会という実証研究に特化した大きな傘の下で宗教心理に興味ある研究者が活動しているというトップダウンの構図があるが、日本の場合は宗教に関する数々の学術団体はあるが、ほとんどが実証科学に特化していない。そのために「横のつながり」や「利便性のあるデータベース」など上記の重要なインフラが欠如している状況である。今後は宗教心理学研究会のような団体がリーダーシップを取り、このような組織構造に風穴を開けることが期待される。

さて最後に今回のオンライン発表に関する感想であるが、ほとんどの研究者がこの2~3年間に発表者と参加者両方の立場に立つ機会があったと思われるため「坊主に説法」的な感想になるが、参加者側の立場としては「安易に参加できる」とか「録画でいつでも見られる」という利点があるであろう。しかし発表者の立場からすれば準備の段階から発表者同士の意思の疎通が不完全であったり、参加者のリアルタイムの反応が見られなかったりしないなどの欠点の方が大きいと思う。特に個人的には研究発表という場は講義や舞台のように弁証法的な要素が多く、発表者・参加者との対話・ボディランゲージから新しい考え方が生まれるという思いが強いため、このようなフォーマットの発表は今後はやりたくないというのが本音である。ということで次回はずいぶん・パーソンでお願いします。

いいね！ オンデマンド動画コンテンツ

木村 健(特定非営利活動法人 ratik)

この間、コロナ禍で各種学会が中止になったり、オンライン開催を余儀なくされたり、たくさんの弊害が発生してきました。ただ、予め準備した動画を web 上で公開する、という発表形態、私はとても気に入っています。時間・空間の制約を受けずに視聴でき、理解の追いつかなかったところは何度でも巻き戻せ、さらにはイベントページのコメント機能を活用すれば、事後的に議論を継続し深めていくこともできるのですから。

日本心理学会第 86 回大会の公募シンポ「掘り起こされていない研究分野を開拓する方法」、興味深く拝聴しました(辻本さん、西脇さん、川島さんは今、こんな風貌をされているのか、とか、松島さんのご自宅(?)で撮影される時も、この熱量なのか、とか、余計なところも含めて...)

タイトルに「現在進行中」と付記されていますが、これは「現在完了進行形」と捉えるべきだな、と感慨深く見ていました。研究会に参加させていただくようになって長くなりますが、みなさんの努力により「完了」してきたものの大きさを改めて感じた次第です。

それにしても「出版」に携わっていながら、これまで研究会の活動に目に見える貢献ができておらず、申し訳ありません。研究成果の発表形態は、大きく変化してきていると思います。ratik では、当初から電子出版や web 発信に重きを置いてきましたが、AmazonPOD はじめブリントンデマンド書籍のラインナップも増え、近々には、英語書籍を Kindle で全世界に配信する計画もあります。発行を巡る障壁を取り除きながら、内容を保証するため、今後とも「注文の多い出版組織」でありたい、と考えています。

また、この 5 年余り、他新興学会の E ジャーナルの立ち上げから編集事務局として参画する

機会を得て、最近 J-STAGE 掲載にも漕ぎ着けました。学会主導で査読誌を運営する上で、審査プロセスを、無償のピアレビューに頼る必要が出てくるかと思います。特に、当該領域を担う研究者の数が限られている場合には、査読の負担が一部の人に集中し、結果として審査の遅延、ひいてはジャーナル自体の評判の低下などを招いてしまうかもしれません。良案はすぐには見つかりませんが、ピアレビューといったれっきとした学術的営みが、研究以外の仕事によって阻害されることがないように、研究者の待遇が改善していくことを切に願います。

素人目には、心理学のような各種手法が確立した領域であれば、たとえ未知の対象であっても、同様の研究を敷衍していけるのではないかと、思ってしまう(それゆえ、なぜ、現代日本の宗教心理学に、こんなにも苦労が多いのか、首を傾げたくなるのです)。反面、私たちは、コロナウイルスの感染や重症化の度合いが、個々の人によって大きく異なる、という事態を目にしました。科学の目は、私たちを「人間」という 1 つのカテゴリーに束ねてしまいますが、この普遍化・平均化の態度は、事柄の本質を見抜く上で、本当に妥当な手続きなのでしょう。

さらに、科学的実証性を厳密に高めていくと、人間の「自由意志」は消え去り、研究者の意志、さらには神の意志(?)さえ、幻想に過ぎなくなります。他方、科学が発見する「法則」も、実は「これまで、そうであった」ということ以上のことは言えていません。そこに、自然界を支配する規則性を見てしまう私たちの態度の方こそ、「信仰」の名にふさわしいのかもしれない。

「宗教」に近接した研究を行う学問には、研究手法に関する哲学的思考が必要なのかもしれませんね。

実証的宗教心理学の挑戦と軌跡

—日本心理学会第86回大会公募シンポジウムへ参加して—

中分 遥(安田女子大学:非会員)

シンポジウム「掘り起こされていない研究分野を開拓する方法(現在進行中):実証的宗教心理学の挑戦」は、「実証的宗教心理学」のテーマにおける個別の研究や方法論を取り上げるのではなく、領域の開拓・活性化について議論するものでした。宗教を科学的・実証的な研究としてアプローチすることは、「怪しい研究」と受け取られることや、宗教を科学的に取り扱うこと自体がナンセンスではないかといった否定的な意見を受けることも少なくありません。本シンポジウムは、こうした現状に対してただただ不満を発するのではなく、具体的な努力を積み重ねてきた発表者の活動の軌跡を辿ることができました。こうした具体的な記録を知ることは、宗教心理学に関心があるのみならず、新規に学術領域を発足させたいと考えている研究者や掘り起こされていない分野の研究者にとっても資料価値があると思いますし、また勇気づけられるものであると感じました。

特に、本シンポジウムで印象深かった点は、領域活性化のための思想的・理念的な議論に終始せず、具体的な手段、そしてその取り組みについて紹介されたことです。研究会(学会)の設立、研究プロジェクトの発足、学術書の出版、学術誌の刊行、関連領域との連結と、いずれも具体的な目標が設定され、そのメリットが議論されるのみならず、実際に達成してきた(ないしは達成に向けた)取り組みが紹介されました。その中でも、掲載料・購読料も無料の学術雑誌「宗教／スピリチュアリティ心理学研究」を立ち上げたという点は最大の成果であり、この成果に至る上で協力してきた代表者およびメンバーの足取りを知ることは大変勉強になりました。

上記のような、これまでの取り組みについて私は強く賛同しますが、今後の発展のために敢えて批判的な指摘をしたいと思います。第一に、宗教学は方法論ではなく対象を扱うもので、

これは宗教心理学も同じはずですが。よって、質問紙研究を基軸とした研究のみならず、実証的な研究手法として認知科学・発達科学・神経科学的に存在する多様なアプローチ(e.g., 視線計測・乳幼児研究・脳画像計測)などが理論的には可能なはずですが。しかし、これは私の偏見である可能性もありますが、一連の取り組みで紹介される研究は調査研究(ないしは社会的プライミングといった社会心理学研究が用いる研究手法)が多い印象を受けました。これは、「実証的宗教心理学」が特定の方法論と結びついた研究領域と認識され、異なる方法論を用いる研究者から距離を置かれるようなケースを生み出す懸念を感じました。その結果、実証的宗教心理学は特定のアプローチを用いた研究のみが許容されるという印象を抱かれ、宗教に関する実証研究の参入障壁となる可能性もあります。この解決策として、例えば生理指標を測定した研究、記憶に着目する研究等の、投稿数が少ないアプローチを対象とした特集号を組むことで宗教心理学が様々な方法論に開かれていることを表明できると思います。また、フィールドワークに実証的・計量的な手法を取り入れている民俗学・人類学の関連領域の研究者、計量テキスト分析のエキスパートである人文情報学の研究者などを招待することで、宗教に関連した他分野の研究者でも実証的な宗教研究に関心を持つきっかけになるかもしれません。

第二に、Masami Takahashi 先生が取り上げた国際化という点です。英語圏は、*Journal of Religion and Spirituality* や *Journal of Cognition and Culture* といった宗教に関する実証的な研究を扱う雑誌が存在しており、これらへの雑誌に日本からの投稿が増加することも望まれます(これは私自身の課題でもあります)。国内で刊行されている論文は海外の研究者に認知されづらく、先行研究として引用される

機会を失う、ないしは言語の問題によって読まれない可能性が高いです。また、日本語でしか研究されていない独自の尺度の開発は、しばしば先行研究とのつながりが希薄になることや、国際的な心理学研究の中での位置付けが難しくなるといった懸念があります。しかしながら、例えば「タタリ」といった英語での表現が難しい概念を、特に計量テキスト分析を行う際には、具体的に分析で用いた単語を、直接表現できる（翻訳言語の単語や概念に置換する必要がない）日本語で論文を執筆するメリットは高いと感じております。また、英語での論文執筆はハードルが高いことは私自身も感じております。日本語で執筆された論文に関しても、著者ないしは第三者が「宗教／スピリチュアリティ心理学研究」で発表された論文群を英文の学術誌ないしは書籍にて発表することも可能であり、これによって和文で刊行された論文に関しても国外への認知度を高めることは可能です（これまで、当該領域の和文論文は出版先が分散されていたため、レビュー論文を執筆するにしても探し出す

のが容易ではありませんでした、新たな学術誌ができることでこの手続きは容易になると思います）。そのため、こうした国際化に貢献する取り組みについて積極的にないしは段階的に進めることもできるかと思えます（e.g., 英文にてメタ分析の論文を投稿するためデータの共有を推奨する、国内の実証的宗教心理学の研究を紹介するレビュー論文を投稿するための金銭的な支援をする）。

以上二点について批判的な指摘をしましたが、ともに対策案を提示したように、これらは克服できる点です。新たな和文の査読付きの学術誌「宗教／スピリチュアリティ心理学研究」が刊行されることは、研究が査読によって洗練されること、また研究発表をする場所が増えることは有意義だと感じています。本雑誌の刊行によって、国内の宗教・スピリチュアリティに関連した実証的な心理学の研究が増えること、また堅実な実証的心理学研究の領域として広く認知されることを期待しております。

事務局からのお知らせ

宗教心理学研究会ニューズレター第35号が発行されました。今回の内容は、日本心理学会第86回大会公募シンポジウムの報告、発表者・参加者からの感想となっております。

日本心理学会第86回大会は対面とオンラインを併用したハイブリッド形式で開催されましたが、公募シンポジウムはオンデマンド形式で行われました。そのため、第86回大会におきましても参加者と直接議論する機会を持つことができませんでした。

そのような中でも、シンポジウムを視聴して下さったお二人の方に感想を書いていただくことができました。木村さん、中分さんに心より感謝申し上げます。

今回のニューズレター第35号を始め、これからも研究会に対する会員の皆さまからのご意見、ご感想をお待ちしております。(K.M.)

[宗教心理学研究会の今後の予定]

2023年9月15日(金)～17日(日)

日本心理学会第87回大会公募シンポジウム(第20回研究発表会) ハイブリッド開催

会場:神戸国際会議場・神戸国際展示場

発行:宗教心理学研究会

編集:宗教心理学研究会事務局

研究会事務局

担当:松島公望[psychology-religion@office.so-net.ne.jp]

研究会ホームページ管理・運営

担当:藤井修平[yrsk.f@nifty.com]

研究会ホームページ

<http://psychology-of-religion-japan.org/>